



心で越える言語の壁

私は中学一年生の頃から地域のボランティアに参加している。ひと月に一度地域の公園のごみ拾いや落ち葉掃きなどを行っている。参加している人たちは年齢も様々だ。参加している人たちの中で、地域の大学に通う大学生の一人と親しくなった。その方は大学のボランティアサークルの代表を務めていた。会った際に「いつか大学生と中学生で一緒に何かやってみたいね。」と互いに話していた。

中学三年生になり、学校のSDGsプロジェクトの仲間としてグループ学習活動が始まった。私は学校の仲間五人と『住み続けられる街づくりを』を達成目標に『市内のヒーローになろう』というプロジェクトチームを結成した。メンバー一人一人がお助けヒーローとなり、自分

たちの住む街の環境や治安の良化、地域の異世代交流の促進をすることが活動目的だ。初めはゴミ拾いや草取りから始めたが、活動の場を広げたいと考え、ボランティアで知り合った大学生に連絡をすることにした。その方は学校の授業での話し合いに参加してくださった。一緒に何ができるか意見交換をし、最終的に大学のサークルでやっている活動に参加させてもらえることになった。夏休みに公民館で小学生に勉強を教えたり、一緒にゲームをしたりして交流するものだ。

夏休みに入り、私たち五人は手作りの腕章と担当カラーのバンダナを準備し、ヒーローになったような気持ちで公民館へと向かった。私はカードゲームのグループの手伝いをするようになった。その中には外国人の女の

子がいた。日本に来て数ヶ月しか経っていないようで片言の日本語で、それでも懸命に輪の中に入ろうとしていた。私はゲームの説明を始めたが、その子の表情を見て

いると困った顔をしていて、うまく伝わっていないことが分かった。その時、英会話教室での外国人の先生とのコミュニケーションを思い出した。私はまだ流暢に英語が話せず、外国人の先生が話す英語が分からない時がある。恥ずかしさと焦りで余計に思考が停止してしまう。

外国人の先生はそんな私に笑顔向け、ゆっくりと身振り手振り簡単な単語を使って伝えようとしてくれる。私は落ち着きを取り戻し先生の動きや表情、わかる単語を手掛かりに理解することができた。そのことを思い出して、私は困っている外国人の子に笑顔でゆっくりとカードを使いながら、簡単な単語で繰り返し説明した。するとその子の表情は明るくなり領いて説明を聞いてくれた。その後は、全員で楽しくゲームをすることができた。終了後、その子が英語で「東京は人が優しく大好きだ。」と話してくれた。正確な翻訳ではないかもしれないが、私の英語力でもそう言っていることが分かった。帰る時、お互い笑顔で「さようなら。」と日本語で挨拶を交わ

した。短い時間だったが、私は言語が違ってもお互いに楽しく交流できたことを嬉しく思った。

私はその子がなぜ日本に来たのか理由は知らないが、東京には仕事や留学、旅行などで外国の方がたくさん訪れている。実際に街で外国人の方が働いている姿をよく目にする。観光客向けの外国語案内やサービスも以前より見かけるようになった。今後グローバル化が進めばその数も増え、外国人と接する機会も多くなるだろう。文化や言語の違う人々と交流するために、言語を学習することは必須であると思う。しかし、それ以上に大切なことは、お互いに相手を理解しようとする心なのではないかと、夏休みのボランティア経験を通して私は感じることもできた。他国の文化や言語に拒否感や苦手意識を持つのではなく、互いに理解しようという気持ちでコミュニケーションをとっていけば、言葉の壁を越えて通じ合えると思う。様々な文化や言語が交わることを受け入れ、理解する心の豊かさを持つことが、グローバル化が進む東京に住む私たちには、今一番大切なことなのではないだろうか。



異文化交流の盛んな東京の未来

皆さんは、東京が好きですか。豊かな自然と、様々な国の料理や日本独自の文化の町。たくさん細長いビルがひしめき合い、最新の流行りの物であふれる世界でも有数の大都会。そんな東京の未来を生きる為に、皆さんはどのような町にしていきたいですか。

私は、東京独自の文化を守りつつ、世界の文化も取り入れた異文化交流の盛んな町にしたいです。

なぜなら、自身の国の文化とは違う物に触れることでお互いに今までになかったアイデアをもらって文化を発展させたり、東京に住む外国人への理解が深まってお互いがより過ごしやすくなったりすると考えたからです。

東京には様々な伝統工芸品があり、例えば江戸切子や東京染小紋が有名です。しかしそれらの伝統工芸品は

今、衰退傾向にあります。そこでこの伝統工芸品の魅力を東京に住む外国人に知ってもらい、少しでも買い手を増やしたり後継者を増やして文化を理解してもらったりすることが大事だと考えます。

伝統工芸品だけでなく、日本料理や温泉などの良さも外国の人に浸透すると、そこに外国の文化や技術が取り入れられて東京だけでなく日本全体の文化が発展するかもしれません。

東京の文化を知ってもらうだけではなく、私達も外国についてもっと知る必要があると考えます。相互理解の為に東京がしている国際交流イベントには、日本人と外国人同士の団体でキャンプをしたり外国語学習会を開いたりなど様々な取り組みがあります。そういったイベン

トに積極的に参加することも、東京の未来の為になると思います。

東京都総務局によると、東京都に住む外国人の問題の一つに人権問題があると言っていて、外国人だからと入店を断られたり面接で不利になったりすることがあると書かれています。

このような人権問題の原因は私達がもっている外国人に対する偏見にあります。外国人だから、外国人なのに、と偏見をもたずに一人の人間としてしっかりと向き合うことで人権問題を解決させることにつながります。

東京の未来をより良くしていくのは、今の大人達ではなく未来の私達です。大人の問題だと考えず、身近なことでと考え、今から問題にしっかりと向き合い、子供でも出来ることをしていきましょう。

では、独自の文化を持ちつつも異文化交流の盛んな東京にするには、私達子供には何ができるでしょうか。大人よりはできることは少ないかもしれませんが、私達子供にだってできることはあります。外国人との交流イベントに参加したり、伝統工芸品の体験会を通して東京の文化を学んだり、東京と外国の繋がりを調べて外国につ

いて知ったりしてそれを東京の未来につなげていくことです。

これからの東京の未来がどうなっていくかは、私達の意識次第です。この東京をより良くし、そこに生きる為に私達にできることをしていきましょう。



明日を良くするには

互いを理解することこそ僕たちができること、そしてしなければいけないことだと思います。

僕たちが毎日生活している東京は、人口千四百万人を超える大都市で、世界中からも多くの人がやってきます。モノにあふれているし、江戸時代以降の文化も残る、とても魅力的な都市です。特にコロナ以降、都心部は外国からの観光客で溢れています。しかし、その光景を見るたびに思うのです。東京とは、果たしてみんなにとって快適な都市なのかと。

世界には、昔から「人種のるつぼ」と呼ばれるような国と都市が沢山あります。ニューヨーク、パリ、シンガポールなどは、街を歩いていると、およそどの場所でも、どの人種が中心なのか分からないほど多様な人々がいま

す。ですので、お店に入っても「外国人」という見方はされず、地元の人と同じように接せられることが多くあります。そのため、僕も身構えることなく自然と打ち解ける事ができるような気がします。

東京はどうでしょうか。日本人ではない方々を多く見かけることは日常になりましたが、果たして僕たちはその人たちを理解して、受け入れているでしょうか。答えは圧倒的にNOだと思います。駅での案内やツーリストインフォメーション、観光地での外国人対応などハード面では少しずつ進歩していると思いますが、僕たち東京で生活している人の「気持ち」には、まだ外国の人たちとの間に壁があるのではないのでしょうか。

未来の東京は、世界に開かれた都市でなくてはいいけま

せん。もっと積極的に外国の文化を学び、習慣を学び、考え方を学ぶ必要があります。今の僕たちは、留学のよう

うな大げさなものだけではなく、身の回りにいらっしやる外国の方と、日常レベルで交流することができます。

これまでの価値観にとらわれない小学校、中学校や高校生の僕たちこそが、外国の人たちにとって、自国と変わらないような快適な東京を作ることができるのではないのでしょうか。旅行で東京にいらっしやるような「普通の外国の方」と接するプログラムを作り、その存在を伝え、僕たち「普通の学生」が参加し、本当の意味でお互いの理解が進むことを目指します。そうすれば、十年後には、誰もが外国の人たちに身構えず接することのできる東京の礎を作れるのではないのでしょうか。

最近、「外国人が素晴らしいと賞賛!」「外国人が大絶賛!」等といった記事を多く見かけます。誇れるところがあるのはいいですが、自己で満足するのではなく、その文化をもっと知ってもらう必要があります。そのために僕たちができるもの、やはり互いの理解を進めることです。未来の東京は、世界の人々が自分の国のように快適に暮らせる場所になってほしいです。人種や信仰、性的

指向などに対する偏見がなく懐の深い都市を目指せるよう、僕は理解を進めていきたいと考えています。



人と人が繋がる街

「あそここの家に新しい人が来るらしいよ。」と親に言われた。それを言われたとき私は自分には関係ないことだと思った。私はもともとその家に住んでいた人とも交流がなかったので今回も変わらないだろうと思ったからである。私は生まれた時からずっと東京に住んでいる。街を歩けば多くの人とすれ違い、建物から人が出入りする様子を見ることが出来る。人が多いと感じることはあっても人が少ないと感じたことは殆どない。だから近所の人が一変変わったところで大した問題ではないと感じたのである。

私はいわゆる「近所づきあい」をあまりしてこなかった。小学生の頃は近くの家の子と一緒に登校したりもした。けれども小学校を卒業すれば自然と一緒に登校す

ることもなくなり、顔を合わせる機会も減った。たまに会ったとしても挨拶を交わす程度で足を止めて話をすることは減多にない。相手が大人ならば尚更その機会は減る。私はそのことで何か不自由な思いをしたこともなければ、それをどうにかしようと思ったこともなかった。けれども今年の元旦、地震のニュースを見てその考えが変わった。地震のような災害はいつ起こるか分からない。周囲の人のことすら知らない私は困ったときに助けを求めることができる相手がいない。助け合うことが必要な場面での自分は無力だと思うと恐ろしくなった。周りの人とコミュニケーションをとることの大切さは、それができなくなったときに初めて実感するものなのかもしれないと感じた。

都会の人は冷たいという言葉聞いたことがある。ど

こで聞いたのかは覚えていないが、ようやくその言葉の意味を理解した。それは都会の人が不親切であるということではなく、その冷え切った人間関係を表していたのだと思う。毎日多くの人と接しているように見えて相手のことをよく知らない。そしてそれに危機感を覚えることもない。人口が少ない地域のほうが人同士の繋がりが強い。人がたくさんいても相手のことを知らないならば、いざという時意味をなさない。互いに無関心な集団では誰も自分のこと以外に関心のない悲しい街になってしまう。周りに人がいるからこそ私たちはそのありがたみに気づけなくなってしまった。

今はインターネットが発達し、遠くの人とも手軽にコミュニケーションをとることができるようになった。しかし、遠くの人とコミュニケーションをとることに夢中になったあまり、近くの人とのコミュニケーションを蔑ろにしてしまった一面もあるのかもしれない。未来の東京を引っ張っていくのは私たちである。だからこそ将来どんな街に住みたいのか、どんな街にしていきたいのかを私たちが考えていかなければならない。私はこの東京

を人と人が助け合うことができる温かい街にしたい。何か困ったことがあったとき、誰かに助けてほしいときに、人種や性別、年齢など関係なく助けを求めることができる街にしていくなさ。その為には互いを理解し、受け入れる姿勢こそが大切だ。人の輪が広がる温かい街、東京。それを実現するために様々な考えに触れ、近くの人とコミュニケーションをとることから始めようと思う。



「未来の東京」を生きていくために私にできること

私が生まれ育ったこの東京は世界でも有数の大都市としてたくさんの人々から知られています。高々と立ち並ぶビルや、くもの巣のように張りめぐらされた交通網に囲まれて何不自由なく生活を送ることができます。しかしそのような生活の裏には多くの問題が存在しています。そのひとつが「環境問題」です。

年々環境問題は深刻さを増すばかりで、私たちも考えさせられる機会が多くなりました。温暖化の進行により異常気象が頻発する中で東京でも暑い日々が続き、毎日のように「猛暑日連続更新!」というニュースを目にします。大量に出るごみによる水質汚染や自動車の排気ガスによる空気汚染なども大きな問題となっています。

そのような中で私たち中学生には何ができるでしょう

どの小さなことを私たちみんなが行うことで東京全体の環境問題を改善することができるのです。

ふたつ目は「自分だけでなく周りを巻き込んで行動を起こすこと」です。例えば学校掃除でクラスメイトに呼びかけ、節水を心掛けることなどもそのひとつになりえるでしょう。また、私の学校では服装への配慮や時間の管理などに対する意識を、学校全体で高めるために生徒主体でイベントが行われることがあります。そのような活動を参考に、エコデーを設けてみんなでエネルギー消費を抑えることを心掛ける日を作ることなども考えられます。

学校の生活だけではなく、自分の家の周辺地域で活動してみることもできます。地域の植樹活動や清掃ボランティアに参加してみたり、それができなくても自分の地域の自治体が環境問題に対してどのような活動をしているのか知ったりすることも大切なことだと思います。以前自治体で行われていたゴミ拾いに私が参加した際には「常にかいだったここは他の誰かがいつもきれいにしてくれていたのか。」「裏路地や駐車場に特にゴミが多く集まってしまうのはなぜだろう。」「これだけ広い地域を

か。

そのひとつとしてまずは「環境問題について知ること」が挙げられると思います。今まで私は環境問題について「私が何をしても変わらないだろうな」と思ってしまう興味を持てずにいました。しかし環境問題は遠い存在ではなく私たちの生活の中で生まれてきたものであり身近に存在しています。それに気が付いた今では自分でもできることを探すべきだと考えています。例えば約千四百万人いる東京都民がシャワー時間をひとり一分だけ短くしたとすると、東京の水の使用量は一日約一億四千万リットル、一年で約五百十一億リットル減らすことができます。他にも使っていない電気をこまめに消す、エコバッグを持ち歩く、クーラーの設定温度を少しだけ上げるな

今までこれだけの少ない人数で掃除していたのか。」などといった今までにない驚きや疑問、そして気付きなどが多くありました。

このように身近なところからアクションを起こしてみることも未来の東京をより持続可能で清潔な街にするための行動ではないでしょうか。

ここまで私は二つの環境問題に対して行うことができている活動を挙げてきました。しかし考えたり文字にしたりするだけでは意味がありません。実際にそれらを行動に移し、自分の目標を実現する。それが未来の東京を生き抜いていく私たちに求められていることなのです。未来の東京を生きていく私たちで東京を作っていくのです。





入選

お茶の水女子大学附属中学校 一年

穀山 杉哉

明日の東京「世界一の健康都市」

私は東京を歩くことが好きです。私は四ッ谷に住んでいます。よく家族で家から新宿御苑、皇居、神宮外苑等までウォーキングに行きます。春は桜、秋は紅葉など、歩く中で東京の四季折々の風景に癒やされています。

なぜウォーキングするか。ウォーキングは健康に良いからです。体を動かすと気持ちも良いです。頭も冴えます。医学的な観点からは、がんや糖尿病などの生活習慣病の予防にもなります。

私は、東京に住んでいる人や訪れる人が、より積極的にウォーキングをすることで、生活習慣病の予防や体力の向上により、健康になることを願います。

私は今までロンドン、パリ、ローマ、ベネチア、ミュンヘンなどで父と一緒に旅行中に魅力的な大都市をウォー

キングした経験があります。パリやローマの歴史ある街並みの美しさ、ベネチアの運河が織りなす宝石箱のような街並みと同じくらい、江戸時代の面影を残す浅草や都内各地の寺社仏閣、ハイドパークにも負けていない新宿御苑など東京の街並みも素晴らしいです。

東京には、約四百軒の銭湯もあります。銭湯は江戸時代から東京に根付いていて、日本の文化です。私もウォーキングをして疲れたり、汗をかいたときには、銭湯に入ることもあります。とても気持ち良いです。また、東京のコンビニ数は七千軒を超えていて、ウォーキング中には、昼夜問わず水分補給やトイレ休憩を気軽にできます。

このように、私はウォーキングするなら世界一東京を

「オススメ」できます。

では、みんなが積極的にウォーキングするに当たって、この先私ができることは何か。私は「あいさつ」が重要だと思いました。歩く中でウォーキングしている人に対し「こんにちは。」「今日は良い天気ですね。」「桜満開ですね。」「紅葉きれいですね。」「グッドアフタヌーン(外国の人に対し)」と積極的に声をかけていきたいです。お互いに気持ち良く歩くことでウォーキングの輪を広げていきたいです。

確かに「あいさつ」ですぐにウォーキングする人達が劇的に増えるわけではないと思います。しかし私は地道に自分ができること、ウォーキング中の「あいさつ」を行い、ウォーキングの裾野を広げていきたいです。

私は、将来東京が世界一の健康都市になり、みんなが健康で幸せになることを切に願っています。



皆が快適に暮らせるために

「未来の東京」で暮らす僕達は幸せに暮らせているだろうか。東京都が策定した「未来の東京」戦略が進めば、東京はより持続可能な社会に近づいているはずだ。では、そこで暮らしている僕達は持続可能な暮らしが出来ているだろうか。

最近、街中でよく外国人を見かける。ほとんどがインバウンドなのだが、移住してきたという話も聞いた事がある。見た目は日本人と一切変わらないが、実は外国人だったという事もあった。見た目で分らないのは外国人だけではない。性的マイノリティの人や外見では分からない障がいを抱えている人達もそうだ。僕は、この見た目では分からない事情を抱えた人達も、皆同じように快適に暮らして欲しいと思っている。外国人、障がい者

だけでなく高齢者も、全ての人が快適に暮らせるにはどうしたらよいのだろうか。

以前、僕がデイズニールランドに行った時、こんな事があった。夏の暑い中、アトラクションに一時以上並んでようやく僕の番になった時、急にスタッフが連れて来た若者に割り込まれた。スタッフの話によると、「体温調整が出来ない障がいをお持ちの方を先にお通しします。」との事だったので、暑い所で待たされたら命に関わるだろうと、納得出来た。しかし、スタッフの説明を聞いていない後方からは「本当に障がい者？」「ずるい」という声が聞こえ、不快そうな雰囲気だった。皆が快適に暮らせるために、見た目で分からない障がいもある、などといった正しい知識を持つべきだと思う。

現在、東京で暮らす外国人は約五十八万人で、都民のおよそ二十四人に一人に及んでいる。そして、住宅の賃貸や商店などの入店を断られたり、就労に関して不合理な扱いを受けたりしている。何故こういった差別をしてしまうのかというと、文化や習慣、言語の違いで問題を起こすだろうといった固定観念に未だ囚われているからだと思う。というのも、僕達は強い思い込みを持っている。せいで意識をせずとも差別的な扱いをしているのだ。

例えば「障がい者」特別、可哀想」という思い込みのせいで行き過ぎた配慮をしてしまう事がある。これは、障がい者からするとありがた迷惑だろう。このような固定観念に囚われないようにするためには、まず自分の思い込みを疑う事が大事だと思う。自分が必ず正しいと思わず、他人を受け入れるための柔軟性を持つ事で、より視野が広がって、無意識に差別的な発言や行動をしなくなるのではないか。

「未来の東京」は高齢化が進み、障がい者も増加しているだろう。そこには外国人もいるだろう。その中で、誰もが持続可能に暮らせるために僕に出来る事は、正しい知識を持ち他人を受け入れるための柔軟性を持つ事であ

る。また、他人を受け入れるためには、対話が必要である。そのために、僕は英語の勉強をしている。英語の勉強をして、実際に外国に行ってみて文化や習慣を学んで視野を広げてみたい。そこで得たものを活かすことで、「未来の東京」に貢献できると僕は信じている。



伝統と革新が織りなす東京

「江戸」「祭り」「寺社仏閣」と「高層ビル」「アニメ・マンガ」「流行」は、対照的なようでいてどちらも東京を象徴する言葉です。長い歴史のなかで培われてきた伝統と、常に新しいものを取り入れる革新が融合するという多面性こそが東京の最大の魅力です。例えば浅草寺や東京スカイツリーのように、伝統的な文化と革新的な要素が調和した景観は、東京ならではの美しさを生み出しています。これは単なる古さと新しさの組み合わせではなく、歴史と現代が合わさることで生まれる、独特の深みと奥ゆかしさを伴っています。

私は伝統と革新の融合が、東京のもつ真の魅力だと感じた経験があります。それは豊洲千客万来に行ったときです。豊洲千客万来は露天風呂やエステ、展望台などの

現代的な建物が入っているけれどその外装と内装が江戸の町並みになっているのが大きな特徴です。それを初めて見て私は「これこそが東京だ。」と思うとともに建物に大きな魅力を感じました。

しかし、伝統と革新を融合させるにはいくつか課題点があります。それは、「伝統文化の衰退」と「融合が不十分である」ということです。

日本の伝統は後継者不足や都市化によって衰退の危機に瀕しています。伝統の継承は、単に過去の文化を保存するだけでなく、地域のアイデンティティを確立し、人々の心を豊かにする上で重要な役割を果たします。伝統文化を未来に継承していくためには、少数の力では規模の大きい活動ができず、効果的ではありません。そ

こで、東京都ができることとして二つのことを考えました。

一つ目は「若者への発信」です。東京都がSNSを活用し、伝統文化をより身近で魅力的なものだと発信することで、伝統文化をよく知らない若者の関心を惹き付けます。

二つ目は「伝統文化の現代化」です。伝統的な技術や文化をもとに、現代のニーズや価値観にあった新しい製品を生み出します。例えば、伝統的なデザインを現代の小物や建築物に取り入れることができます。このように伝統文化をそのままの形で残すのではなく、現代社会のニーズに合わせて変化させていくことが重要です。伝統文化の継承にも「新しさ」を取り入れるべきなのです。

「融合が不十分である」というのは伝統と革新それぞれの活動は進んでいるけれど、その両者の融合が不十分であるということです。伝統と革新の融合が不十分であるとお互いの相乗効果が生まれず、魅力が低下してしまします。伝統と革新が十分に融合した例として、3DスキャンやVRなどの技術を活用して伝統工芸品をデジタルデータ化したり、現代音楽に三味線や尺八といった伝

統的な楽器を使ったりすることで新たな表現の可能性を広げるといったことがあります。

自分ひとりでは何ができるでしょうか。私は伝統と革新に対する理解を深め、両者の融合を受け入れられるようにすることができると思います。私達はまだ、伝統と革新を別のものだと考え線引きしています。しかし、伝統的なイベントに積極的に参加したり、最新の技術に触れて、伝統と革新の理解を深めたりすることで、伝統と革新を融合させる魅力を見つけることができます。東京を形作るのは社会全体を構成する私たちであるため、私たち一人一人の価値観を変えることで未来の東京を理想の都市にすることができなのです。世界の主要都市と比較しても、東京は多様な文化が混じり合い、常に変化し続けている都市です。未来の東京を、伝統と革新が共存する世界でも魅力的な都市の一つにしていきたいためには、東京の未来に対して責任を持って行動していきたいです。

希望の未来へ

東京都国分寺市。十年以上住んでいるこの街が私は大好きだ。自然豊かで歴史深い国分寺の何よりの魅力は、親切な人が多いことだと思う。

私の通う学校では、SDGsをテーマとしたプロジェクト学習が行われている。生徒自身が興味のあることを調べ、国分寺のために行動に移していくのだ。活動が始まって約三か月が経ったが、毎回のプロジェクトの時間が待ち遠しい。しかし正直、なぜ中学三年生がこのプロジェクトをやるのか疑問だった。進路のこと。修学旅行のこと。やるべきことばかりの三年生が対象である必要性とは何だろうか。そんな疑問を心のどこかで抱きながらプロジェクト学習を進めていた。

私は生花のリサイクルプロジェクトに参加している。

とハイタッチをした。約束した訪問日。プロジェクトメンバーの一人と一緒にお花屋さんを訪れた。まるで絵本の中に入ったような可愛らしいお店。綺麗なお花に囲まれた店内。私たちは釘付けになっていた。そして抱え切れないほどのお花を私たちに譲ってくれた。廃棄してしまうとは思えないほど、どれも素敵なお花を放っていた。そんな中、私は一つの花に目を奪われた。「希望」「前進」という花言葉をもつガーベラ。このお花屋さんと出会えて親切にしてくれたことは紛れもない「希望」だった。そのとき私ははっとした。私たちは半年後には義務教育を終え、社会人への仲間入りを果たす。社会を作っていく一員となるのだ。私にとってこのプロジェクト活動は、社会に出るという自覚を持つきっかけとなった。義務教育最後の年だからこそ、この活動をすることに意義があると思う。

半年後。三年後。五年後。十年後。私はどんな人になっているだろうか。東京は、国分寺はどんな街になっているだろうか。きつと良いことも、悲しいこともあるだろう。しかし、私は人に親切にできて助け合える世界を未来に残していきたい。未来を担うのは私たちだ。私たち

「当たり前」が崩れ去った二〇二〇年。新型コロナウイルスにより、多くの行事やイベントが中止になったり、規模が縮小されたりした。そんな中、誰の目にも触れずに廃棄されたお花がたくさんある。一説によると、そんな「ロスフラワー」は年間約十億本にも上るといふ。私たちは、ロスフラワーを少しでも減らし、長くお花を楽しんでもらうためにこのプロジェクトを行っている。まずはお花を用意するところからだ。私たちは地域のお花屋さんで連絡をして譲ってもらえないかお願いすることにした。一人ずつ電話を掛けたが繋がらなかったり、定休日だったりして許可を得られなかった。ついに私の番。「もちろんいいですよ。お待ちしております。」なんと快く了承してくれたのだ。私は嬉しくてプロジェクトメンバー

が行動に移し、伝えていくことが何よりもの近道だと思う。社会全体が暗くなるときもあるかもしれない。そんなときでも、私は「希望」に向かって常に「前進」できる人でありたい。そしてそんな世界が広がっていることを私は願う。



共生から考える未来の東京に向けて

今年の林間学校は、長野県の「志賀高原ユネスコエコパーク」に行った。そこでは、自然と地域住民の人々が共生し、持続可能な経済活動を進める取り組みが行われている。

三日間の学習の中で、志賀高原における自然との共生の背景には、地域住民の方々が自然保護に対して高い意識を持っていることや、取り組みへの積極的な姿勢が大きな影響を与えていることを知った。このことから東京でも同じように、東京に住んでいる私たちがアクションを起こすことの影響はとても大きいものになるのではないかと思った。

志賀高原で実際に見たり聞いたりして共生を学び、じっくりと考えたので、私は「誰もが個性を輝かせるこ

とができる未来の東京」を実現する方法を、共生の視点から考えてみることにした。

では、それを実現するためには中学生の自分にはどのようなことができるのだろうか。

その一つ目は、日常生活から理解と尊重を大切にすることだ。例えば、クラスメイトや友だちとの違いを尊重したり、異なる意見や文化、背景を持っている人とも積極的に関わったりすることで多様な価値観への理解を深めることができると思う。また、いじめや差別に対して自分から積極的に意見を言うことも大切だ。そうすることで、周りの人を大切にして支え合い、誰もが輝ける共生の社会を作ることができると思う。

二つ目は、学びの機会を積極的に利用して意識を高め

ることだ。近年では知識や情報を得るための方法はたくさんあるが、その中でも多様性に関する授業や講演、ワークショップに積極的に参加し、知識を得たり他の人と意見交流をしたりすることも理解を深めることに繋がると思う。

三つ目は、具体的な行動をすることだ。以前、地域で行われているお祭りの後片付けのボランティア活動に参加したときの経験から、そのような地域活動は年齢も背景も価値観も多様なたくさんの人と人同士が関わり、協力している共生社会の一環であるということを実感した。これからは、他にもごみ拾いや高齢者支援などの地域活動にも参加してそれを実感することで、共生社会における自分の役割や責任を考える機会にもしていきたい。

最後に、私が大人になった未来の東京における「誰もが輝ける共生の社会」の実現に近づくにあたって、課題を解決するために考えることと行動することに対して、他人任せでいるのはいけないと思う。そのため、東京に住んでいる私たち自身が社会の一員として、考え、学び、伝えたり積極的に行動を起こしたりすることをこれから

も続けていきたい。また、環境保護や高齢者支援などの地域活動に対して積極的、精力的になって具体的な取り組みをすることで、共生だけでなく、住んでいる地域や東京全体がさらに発展することにも貢献していきたいと思う。



TOKYOを未来へ繋ぐ

「グローバル」という言葉が似合う都市のひとつが東京だ。僕たちが暮らす東京は、人も文化もとてもバラエティに富んでいて面白い。もちろん、経済の大きさも、安全度が高いことも少なからず影響しているだろう。また、「面白さ」の魅力の一つに、多文化の共生もある。これは、東京のグローバル化を進めている大きな要因でもある、と僕は考えている。

とてもグローバルな社会が、さらに進化していくために必要なことは何だろう。僕たちが組みまなくてはならない課題は何だろう。

人がたくさん住む大きな街だからこそ、環境問題への取り組みや再生可能エネルギーの積極的な導入、地震や台風などの自然災害を日頃から想定して備えておくこ

となどは、当たり前のように案外難しい。住んでいる地域の自治会が主催する防災訓練に参加した時、意識して行動していないと、万が一の備えを忘れてしまいそうで怖いと感じた。地域ごとの取り組みも大切にしながら、IoT技術やAIを積極的に活用して管理する方法であれば、個人でも簡単に導入でき、今年の夏の猛暑による熱中症対策などにも活かせるのではないかと考える。

また、技術の進歩はグローバルな都市として持続可能な社会を創る上で必要不可欠なものだ。「society 5.0」が構築する社会において、多様な文化が共生する環境にその技術は欠かせないし、スマートシティが目指す多くの課題に向き合っている。更に、現在の交通網をより良くしていきながら、新しい交通システムの開発に

も取り組んでいる。

以前「Sushi Tech Tokyo 2024」という未来の技術を体験できるイベントに参加した。ニュースでしか見たことのなかった本物の空飛ぶクルマを見て、その大きさと近未来感に驚かされ、とてもワクワクした。それが実際に運用され、僕たちも乗れるようになるまでには、適切な法整備や安全に運用できる環境づくりが必要だと考えるが、「僕たちの考える未来はもうそこまで来ているんだ」と肌で感じた。

進化し続ける社会には、たくさんのメリットがある一方で、サイバー攻撃などのセキュリティ面におけるリスクも常にある。「技術の進歩」と「安全な社会」の両立を実現するために、安心・安全な環境づくりを行わなければ、せっかく作った素晴らしいものも、誰かの悪意によって悪用されてしまう可能性さえある。実際、今の瞬間、世界の至る所で起こっている争いの場においても、無人ドローンによる凄惨な攻撃が行われ、壮絶な争いが続いているという。

僕は音やクリーンエネルギーに関心を持っているため、将来は排ガスゼロで騒音の全く出ない静音性抜群の

ドローンや航空機を創り、社会に貢献したいと考えている。その反面、どんなに素晴らしい技術を開発しても、使い方を一步でも間違ってしまったては、産業の発展も、世界や地球をより良くしていくというグローバル都市が負う責任も果たせなくなってしまう。

常に進化し続けている東京は、常に新しい景色を見せてくれる。東京のどこへ出かけても新たな発見があり、常に進化し続けている。アップデートを重ねている僕たちの東京において、見た目の変化だけでなく、その社会で生きる僕たち自身がアップデートし続ける必要がある。スマホ一台で生活が成り立つような、今日のデジタル社会に生きる僕たちは、変わり続ける東京と共に進化していく使命と覚悟を持って、未来の東京へ繋げていきたい。

文化の違い

未来の東京。それはグローバル化が進む、多様性の社会。私の学校にもまた一人、中国から来た友達がいる。また中国に限らず、様々な国の人たちが私の学校にいる。さらに周りを見渡してみれば、近隣には、インターナショナルスクールがあり、私達が登下校をしているときに、インドの人たちが横を通りすぎるのが昔よりもはるかに増えたと思う。そして、その現状はとても良い風潮なのではないかと思う。今まで私は、外国人が通りすぎると、どこか違和感を感じることがあった。それは私達にとってグローバル化という言葉自体に馴染みがなく、そのことについて深く考えることもなかったからだと思う。しかし、今となつては、外国人が通りすぎてもあまり違和感を感じず、グローバル化ということが身

近になり、当たり前前に少しずつ近づいているのではないと思う。

だが、課題点もないとは言いきれない。日本の観光地を見てみれば、旅行シーズンになると外国人観光客で溢れ、ゴミの分別をせずに缶とペットボトルが同じところに捨ててあるという課題もある。こうなる原因は「文化による違い」ではないだろうか。ゴミは燃えるゴミ、燃えないゴミ、プラスチックなど、種類別にしっかりと分別する、という考えが日本人の大抵の人に根付いているのではないだろうか。しかし、外国人からしたらゴミの捨て方について、日本に来たときに理解しにくいという意見を聞くことも稀ではない。だが、それに対して、外国人に日本の文化を押し付けるとするのはどこか抵抗

がある。だとすれば、私達にできることは、「文化を共有し受け入れる」ということではないだろうか。文化による違いはむしろ当たり前なのだ。生まれ育った環境が違い、話す言葉も違うのだから。けれど、分かり合えないということではない。私の学校では、文化の違いがあっても、互いの意見を共有し、互いに受け入れることで、仲間となり、共に生活することができる。社会でも同じように、文化を共有し受け入れることで、共に良い社会を作り上げていくことができるのではないだろうか。

私が思い描く未来の東京は、様々な人たちが共存し、共に高め合う関係性を自然と確立できる社会。最初は難しいかもしれない。でも、共に社会を作っていく一つの架け橋として、互いに受け入れることが私達に必要なことなのではないだろうか。分かり合える。文化が違えど、同じ人間なのだから。





未来へつなぐ東京の伝統

小学校の時、家族で八丈島を訪れた際、伝統工芸品である本場黄八丈の織物体験をしたことがとても印象に残っている。島の植物染料で色付けされた黄色や黒の絹糸を使って、チェック柄の織物を織るのは非常に複雑で時間がかかった。しかし、苦勞して仕上げた小さなコースターは、今も私の手元にあり、大切に使っている。私は、この体験をきっかけに、初めて伝統工芸品に興味を持った。

帰宅後、東京の伝統工芸品について調べると、自宅にある江戸切子のグラスや江戸木目込みのひな人形も、東京の伝統工芸品だと知った。東京にもこんなに多くの伝統工芸品があることに驚いたのを覚えている。

ただ残念なことに、東京都産業労働局のホームページ

いる。

コロナ禍が終わり、昨年あたりから東京に外国人観光客が戻ってきている。浅草や渋谷などで、多くの外国人を見かけるようになった。外国人が日本を旅行先に選ぶ理由に、日本の伝統文化に惹かれることを挙げる人が多いと聞いた。特に、お寺や神社、お祭り、着付けや茶道体験など、日本独自の伝統文化を体験するツアーが人気だそう。

この話を聞いて、私は東京の伝統工芸を守ることが東京の文化の魅力を守ることだと思った。私は、将来、伝統工芸をはじめとした日本独自の文化の魅力を日本人だけでなく、海外の人にも伝えられる大人になりたいと思った。そのためには、日本文化を学ぶことはもちろん、外国の文化も学び、日本文化の良さをより魅力的に伝えられなければならないと思う。

そのために今の私に出来ることは、英語で会話ができるように勉強すること、そして東京の伝統工芸や文化に親しみ、学ぶことだと思う。伝統工芸の体験イベントやワークショップに参加し、実際に職人さんと交流することで、伝統工芸の技術や歴史を学ぶ機会を増やしてい

によると、近年、コロナ禍を経て伝統工芸品の需要はさらに低迷し、存続の危機に瀕しているという。昔ながらのデザインが現代の生活や感性に合わない等の理由があるようだ。また、後継者不足も深刻だそう。二十から三十代の若い職人はほとんどおらず、多くが六十五歳以上の職人だ。さらに、高齢な職人は作る以外のこと苦手な人が多く、オンライン販売にも対応できないため、若い世代が伝統工芸品に触れる機会も少ない。このような背景から、若い世代の関心が薄れてしまっている。

そうした厳しい状況ではあるものの、最近では伝統工芸の継承を守る動きが少しずつ増えているそう。職人の技術力とおしゃれなデザインのコラボで商品を作ったり、オンライン販売やイベントを行う動きも増えてきて

たい。自分で体験したことをSNSで発信することも良いと思った。同じくらいの年代の友達にも興味を持ってもらえるように写真や動画で工夫したい。

東京は大会でありながら、公園や郊外の自然も豊かで美しい街だ。美味しいお店やおしゃれなお店も近くにあるので、東京が大好きだ。自分の生まれ育った東京が、未来でも世界中から愛され、魅力的な街であり続けてほしいと願っている。そのために、私たち若い世代が東京の伝統工芸に興味を持って、体験して、発信していくことで、未来にも繋いでいきたい。



私の東京人生計画

慶應義塾中等部 一年 保田 恵那

「未来の東京」と言われてあなたは何を思い浮かべますか。外国人が増えた東京、緑地の減った東京、人口が増えた東京、ネット社会となった東京、高齢者の増えた東京、物価の上がった東京など、様々な未来が頭に浮かぶでしょう。

その中で私が真っ先に想像した未来の東京を、そこで生きていくために私たちにできることと共に三つ紹介したいと思います。

一つ目は外国人の観光客や労働者が増える未来です。そして、ここで生きるために私たちにできることは語学の勉強だと思います。

外国人が増加すると仕事や生活において外国人と交流する機会が増えるでしょう。そのときに必要になってく

るのが語学力だと思います。英語や複数の言語が扱えると話がスムーズになり、コミュニケーションが取りやすいので便利です。

また、グローバル化が進むことでさらに伝統文化が大切になり、日本文化を知ること重要になってきます。そして、外国の文化を受け入れ、理解することも外国人の多い環境で過ごすために必要なことです。このような環境を生きていくために異文化を先入観で差別せず、知ろうとし、興味を持つとうとすることや、常に国際的な視点を持つことも大事だと思います。

二つ目は環境問題の増えた未来です。

今でも温暖化やゴミ問題など様々な問題を抱える東京ですが、未来の東京ではさらにそれが深刻化しているの

ではないでしょうか。そうすると東京はとても住みにくい街になってしまいます。

東京を守るために私たちにできることはたくさんあります。例えば、ゴミを減らすために無駄な物を買わないようにしたり、ゴミをできるだけリサイクルしたりすることです。

日々の生活の中でもゴミの分別や詰め替え商品の購入などできることは多いでしょう。

また、フードロスも私たちの個人の意識で変えられると思います。無駄な食材の購入を控えたり、自分が食べようと思った分は食べきったりするなどの小さな積み重ねが大きな変化になっていきます。

普段から環境を気遣い、エコを心がけることがとても大切だと思います。これは未来の東京を生きていくためだけでなく、今の東京を、いや地球を生きていくために必要なことなのではないでしょうか。

三つ目はネット社会となった未来です。

これは未来ではなく、今の話でもあります。大人になったときにどうネット社会を生き抜くか考えることは将来、とても役に立つと思います。

急速な文明の発達により、電子機器が普及したこの時

代ではどんなことが求められるのでしょうか。

普段の生活では電子決済やオンライン注文で電子機器が必要とされます。

キャッシュレスやネットショッピングの進んだ今では、スマートフォンは持っていて当たり前となり、お店で食事を注文する際もスマートフォンを使って、インターネット経由で注文することも多くなってきました。

このように考えるとこれからの時代はスマートフォンなどの電子機器を最大限使いこなすことが必要だと考えられます。

また、仕事の時にも紙資源を大切にし、スマホやパソコンなどの電子機器を使って仕事ができるととても便利です。

しかし、インターネットや電子機器には様々な危険があります。ですから今のうちから正しい使い方を学び、将来、安全に使いこなせるようにしたいです。

このように未来の東京を生きていくためにできることはたくさんあります。今から少しずつ努力していくことが未来の私たちに繋がっていくので、これからは私は大切な東京を生きていくためにまっすぐ努力していきます。

思いやりをつなぐ

未来の東京は今よりもAI技術が発展した社会となり教育も大きく変わっていると思う。職業もAI技術によって数多くの職業がなくなっているだろう。その中で東京では人と人の関わる機会が先駆けて他県よりも減ると考える。

私の将来の夢は小学校教諭だ。小学校二年生の冬、突然新型コロナウイルス感染症が流行し小学校が長期休校となり、学校行事が全て中止となった。学校が大好きだった私にとっては苦痛の時間だった。ステイホームと言われ、友達とも会えない寂しい時間を過ごした。通常登校となっても感染症対策のため学校生活では多くのことが制限されたが、当時の担任の先生は私たちと過ごす時間を大切にしてくれた。たくさん一緒に遊んでくれ

合って助け合っている。

AI技術が発展しても、教師という職業は人でないといけない仕事のひとつである。それは人と人の関わりを教えることのできる職業であるからだ。SDGsの目標四「質の高い教育をみんなに」の質とは何か。私は思いやりだと思う。先生から教えてもらった「挨拶をしよう。」「友達に優しくしよう。」「ありがとうを伝えよう。」「素直に謝ろう。」という教育は人と人でなければ伝わらないし学べないことであるからだ。

そして、東京の発展は地方や海外とのつながりでより進んでいくと思う。その中で大切にしなければならぬことはこれも、思いやりだと思う。思いやりの心があれば、日本各地で困ったことがあっても助け合うことができるし、グローバルに国境を越えても思いやりの心は、世界共通で伝わる。誰かの役に立ちたいという思いやりの気持ちは技術の発展においても重要である。

私が思い描く未来の東京は世界で一番、思いやりの言葉や心があふれている住みやすい街だ。技術が発展して人と関わる機会が少なくなったとしても、困っている人がいたら声を掛け、助け合うことができるあたたかい街

で、いつも私たちの心に寄り添ってくれていた。子どもたちの不安な心は先生のおかげで解消され、楽しい小学校生活を過ごすことができた。いつもあたたかい笑顔で働く先生の姿を見て、私も小学校の先生になりたいと思うようになった。

そんな新型コロナウイルスの流行によって一気にデジタル化が進んだと私は感じる。例えば、スーパーやコンビニエンスストアでのセルフレジ化や飲食店でのタブレット注文、学校や習い事のオンライン授業だ。人が行っていた仕事を人がいなくてもできる仕事となり定着した。私は便利になったと感じるが不便を感じることもある。よく見かけるのがセルフレジで困っている年配者の姿だ。近くに店員がいないときはお客同士で声を掛け

にすべきだと思う。人と人を支え合う思いやりの心を未来へつなげたい。そのために私は小学校教諭になる夢を実現できるように努力をする。そして、小学校教諭になれば子どもたちに沢山の人の関わりを作り、子どもたちの思いやりの心を育む教育を大切にしたい。そして、いつも子どもたちの心に寄り添うことのできる先生になる。私は思いやりのバトンを未来につなぐ。

